

1

正常成人における F 波測定時に記録される A 波の評価

脳波・筋電図検査室¹, 脳神経センター神経内科²

○安田さゆり¹, 関 容子¹, 菊地ひとみ¹,
野澤由美子¹, 伊藤英一², 大澤美貴雄²

【目的】A 波は、軸索反射 (axon-reflex) などのことを指しているが、①波形が変化しない、②潜時の変化が 1.5~4.0msec 以内、③20 回刺激して 4~8 回以上出現すること、と定義している文献が多い。A 波は、長潜時電位の一つで、M 波と F 波の中間に出現し、F 波の測定時にまれにみられる。これは、下肢では正常者でもしばしば認められる波形であるが、実際どの程度出現するか、当検査室で正常者において検討した。

【対象】正常成人 16 例の 32 肢 (男性 6 例、女性 10 例、21 歳~58 歳、平均年齢 34±0.35 歳) を対象とした。

【方法】当検査室で行っている下肢 F 波の測定方法で実施した。足首の後脛骨神経を電気刺激し、母趾外転筋 (AH Abductor Hallucis) から記録した。測定は両下肢で行った。

AH から M 波の最大上刺激強度で F 波の出現を確認し、16 回連続記録した。その際 A 波が確認出来たら、中枢側に刺激部位を 3 cm 移動し再度刺激をする。その波形の潜時が速くなったら A 波と判定した。

【結果】16 名中 2 名で A 波が認められ、ともに一側のみに 1 波形であった。

【考察】今回の検討でも、正常者で A 波は認められた。その出現頻度は約 6.3% であり、正常者の A 波の出現率としては低いと思われる。現在、A 波の意義について一定の見解に至っていないが、何らかの神経障害の存在を示唆する所見も可能性も否定できない。今後、症例数を増やし検討する必要がある。

2

HCV RNA 定量の抽出時に振とう機を用いた系の検討

遺伝子関連検査室¹, 消化器外科²

○高柳嘉代¹, 土屋真美¹, 三浦ひとみ¹, 有賀淳²

【目的】コバスアンプリコア HCV モニター v2.0 について、通常の抽出方法で実施する。

検体希釈液中でのチップでチューブ壁を削る操作 (カリカリ法) を簡略化し、コストを削減するため、高性能の振とう機を用いた系について、HCV RNA の定量値が正しく出るか検討を行った。

【試料および方法】当検査室に HCV RNA 定量検査依頼のあった血清をハイレンジ法にて抽出を行った。

①2 検体に検体希釈液を加えた後、振とう機で 10、15、20 分最大出力で振とうし、カリカリ法と比較検討した (カリカリ法は n=1、その他はそれぞれ n=3)。

上記の計 20 検体について、コバスアンプリコアで増幅、検出操作を行った。

②2 検体に検体希釈液を加えた後、振とう機で 10、15 分最大出力で振とうした (それぞれ n=5)。

上記の計 20 検体について、コバスアンプリコアで増幅、検出操作を行った。

【結果】①各振とう時間における HCV RNA 定量値は、カリカリ法と同等の結果であると判断された。

②各振とう時間における HCV RNA 定量値は、同等の結果であると判断された。

【考察】振とう機を用いた抽出方法でも、通常の抽出方法と同等の定量値が得られたため、振とう機を用いた抽出方法で検査を行うことが可能である。この抽出方法を用いた場合、抽出方法の簡略化とコスト削減ができる。また、振とう時間は 10、15、20 分共に同等の結果が得られたため、10 分で設定することで時間の短縮も可能である。